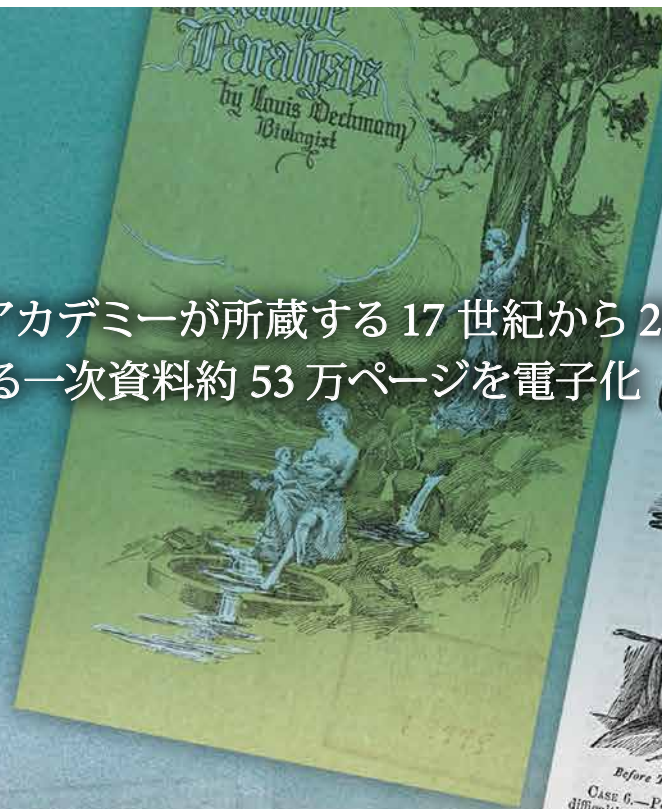




ニューヨーク医学アカデミーが所蔵する 17 世紀から 20 世紀までの
欧米障害史に関する一次資料約 53 万ページを電子化



History of Disabilities

Disabilities in Society, Seventeenth to Twentieth Century

History of Disabilities

Disabilities in Society, Seventeenth

17世紀から20世紀までの欧米障害史に関する一次資料約53万ページを電子化

障害の歴史において障害とは障害者個人に起因する異常な状態であり、これを正常な状態へ回復するために医学的治療を施すべき対象であるとみなされてきました。この言説は障害の歴史の中で支配的な言説として長く影響を及ぼしてきましたが、20世紀になると再審に付されるようになります。障害は医学的な現象であるとともに社会的、政治的、文化的現象でもあるとの認識が広まり、健全と障害の区別は自明ではなく、社会的に構築されたものであり、特定の人々を障害者と名指しする社会規範の存在自体に関心が向けられるようになりました。この変化は実践的には障害者の権利拡張運動を通して各種の障害者法制の成立を促す一方で、学問の場で障害研究が人文系の重要な研究分野として確立するのを後押ししました。本アーカイブは障害を社会的現象とみなす障害研究の進展を受けて、障害者が社会の中で表象され、統制されてきた事情、特定の人々を障害者と名指しする社会的規範の歴史を研究するための資料集となるべく、17世紀から20世紀までの数世紀に亘る障害に関する一次資料を電子化して提供しています。収録資料はニューヨーク医学アカデミーが所蔵する書籍、パンフレット、雑誌、報告書、個人文書で、総ページ数は約53万ページに及びます。各コレクションは米国に限らず英国やヨーロッパ諸国の障害に関する資料を広くカバーするよう構築されてきました。本アーカイブは初の本格的な欧米障害史デジタルアーカイブです。

本アーカイブは他のアーカイブと同様、OCRテキストを生成しフルテキスト検索を実現していますが、本アーカイブ独自の特徴として、スクリーンリーダーを利用したより快適な読解を実現するために、英語の活字文献に限り、複数のOCRプログラムによる読み取り結果を照合し、読み取りエラーがある場合は可能な限りマニュアルで修正しています。(英語以外の言語の文献、手書き文書は対象外です)

本アーカイブの収録資料には現代では差別的であるため使用することが望ましくないとされる語句が使われています。小社はこれらの資料を研究・教育目的に提供するものであり、資料で表明されている特定の見解を支持するものではありません。

収録コレクション

ニューヨーク医学アカデミー図書館所蔵障害関係書籍集成

Books about Disabilities from the New York Academy of Medicine Library

ニューヨーク医学アカデミーが所蔵する障害に関する約825冊の書籍を収録します。肢体の不自由な人、肢体を切断した人、視覚障害者、聴覚障害者、言語障害者、精神障害者、障害児童等々、様々な種類の障害者に関する書籍が収録されています。書籍の表題からは当時の精神医学界の障害に対する思考や分類法が見えてきます。→3ページ以降に収録文献例を掲載しています

ニューヨーク医学アカデミー図書館所蔵障害関係パンフレット集成

Health Pamphlets about Disabilities from the New York Academy of Medicine Library

ニューヨーク医学アカデミーが所蔵する医療パンフレットコレクションから障害に関する約2,800冊のパンフレットを収録します。これらのパンフレットは永続的な保存を想定したものではない印刷物や商業出版社の販売チャンネルで流通したものではない印刷物が多く、現在入手困難であるのは勿論、所蔵機関も稀です。加えて目録化がされていないため、書誌情報すら入手が困難です。→3ページ以降に収録文献例を掲載しています

ダグラス・C・マクマートリー肢体不自由者コレクション

Douglas C. McMurtrie Cripples Collection

ダグラス・C・マクマートリーはタイポグラファー、書誌学者ですが、身体障害関係の雑誌を編集し、身体障害者協会会長、赤十字身体障害者研究所所長として第一次大戦の負傷兵士のためのリハビリテーションセンターを設立し、あらゆる障害者の社会復帰に尽力するなど、その名は障害史にも刻印されています。本コレクションは障害者やリハビリテーションに関する書籍、パンフレット、報告書等約3,500点(272冊に製本)を収録するもので、19世紀後半から20世紀前半にかけての北米、英国、大英帝国自治領、欧州諸国等の地域をカバーします。大半は英語文献ですが、他の欧語文献も収録されています。



靴工房で靴づくりをする肢体不自由の少年たち (McMurtrie Volume P302 McM)

チャールズ・ルーミス・デйна文書集

Charles Loomis Dana Papers, 1876-1932

チャールズ・ルーミス・デйнаは現存する米国最古の公立病院ヘルズヴェル病院の神経科の医師で、ニューヨーク医学アカデミー、ニューヨーク神経学会、米国神経学会の会長を歴任した20世紀前半のニューヨーク医学界の重鎮です。本コレクションはデйнаが神経科医師のキャリアの中で残した精神医学、精神疾患、アルコール依存、筆跡、テレパシー、医学史等の主題に関する論文や診療カルテ、講演原稿や書籍出版のためのタイプ原稿を収録します。鬱、不安、偏執症、不眠症、早発性認知症、片頭痛、神経衰弱症、精神衰弱、癲癇、側索硬化症、耳鳴り、脳炎、嗜眠性脳炎等の症例が挙げられています。

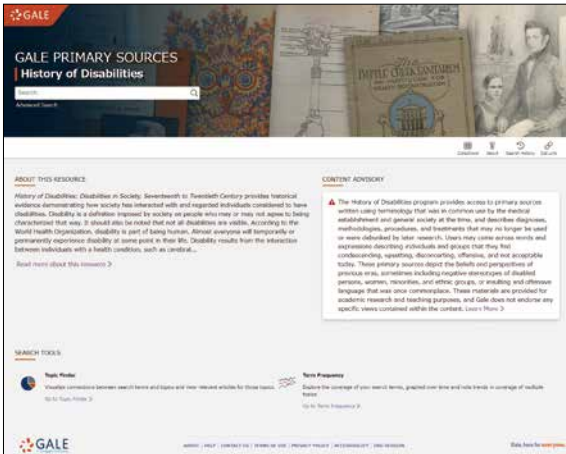
アレクサンダー・E・マクドナルド文書集

Alexander E. Macdonald Papers, 1865-1906

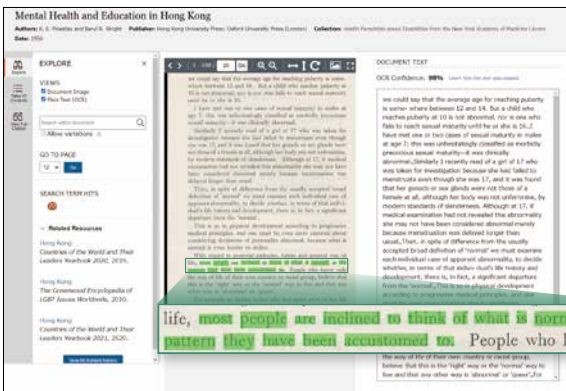
アレクサンダー・E・マクドナルドはブラックウェル島の慈善病院の医局長、ワーズ島の精神病院の医療部長、ニューヨーク市精神病院(後のマンハッタン病院)の医療部長を歴任する傍ら、ニューヨーク大学の精神医学と医事法の教授を務めたニューヨークの著名な精神科医です。本コレクションはマクドナルドの著作物や文書を収録します。19世紀後半から20世紀初頭のニューヨーク精神病院の実情を伝える貴重な資料です。

マクドナルドは結核治療法としてテント生活を導入したが、右はマンハッタン病院の敷地内に設けられた屋外テント (Subseries A: Annual Reports, Subseries 2: Manhattan State Hospital, Sixth Annual Report of Same for the Year Ending September 30, 1902)

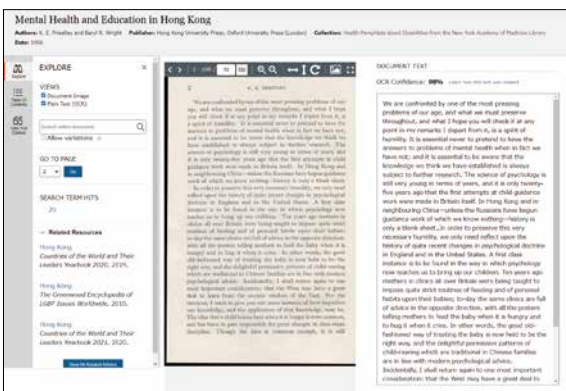




トップページ



一字一句をフルテキスト検索、検索語はハイライト表示



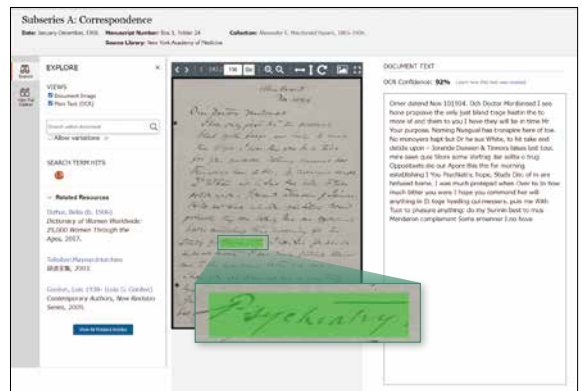
文書表示画面では手書き文書を含め、文書イメージとOCR/HTRテキストを左右見開きで表示することができます。通常の小社アーカイブでは文書イメージのみがデフォルト設定で、見開き表示を選択することができますが、本アーカイブでは見開き表示がデフォルト設定になっています。

Advanced Search

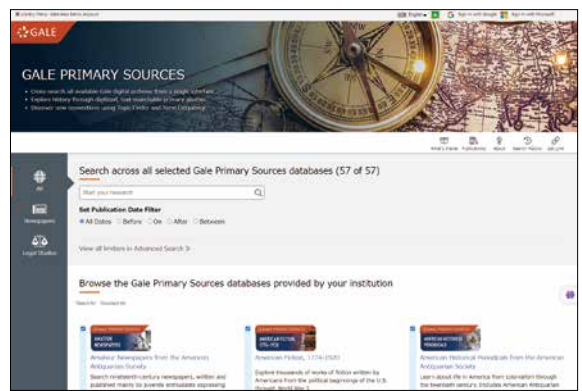
Search Terms

Terms	Field
Search for <input type="text"/>	<input type="text" value="Keyword"/>
And <input type="text"/>	<input type="text" value="Document Title"/>
And <input type="text"/>	<input type="text" value="Entire Document"/>
<input type="checkbox"/> Allow variations	<input type="text" value="Author/Creator"/>
<input type="button" value="Search"/>	<input type="text" value="Place of Publication"/>
<input type="button" value="Add a Row"/>	<input type="text" value="Subject"/>
	<input type="text" value="Manuscript Number"/>
	<input type="text" value="Gale Document Number"/>

詳細検索 (検索範囲の指定・掛け合わせ検索・ファジー検索)



手書き文書もフルテキスト検索



統合検索プラットフォーム Gale Primary Sources では追加コストなしで導入済の Gale の買切データベースとの横断検索ができます。

データベースの概要

- ◆ 収録資料：書籍、パンフレット、タイプ打ち原稿、手書き文書 (合計約 53 万ページ) (すべてフルテキスト検索に対応)
- ◆ 収録資料の期間：17 世紀～ 20 世紀
- ◆ 収録資料の言語：英語、フランス語、ドイツ語他
- ◆ 原資料所蔵機関：ニューヨーク医学アカデミー
- ◆ 機能：ページ送り、画面拡大・縮小、全画面表示、輝度・コントラスト調整のビューワ機能の他、印刷、PDF ファイルのダウンロード、OCR/HTR テキストのダウンロード、書誌自動生成、書誌情報のエクスポート、メール送信、Google / Microsoft ログインとクラウド連携を実装、別契約の Gale Digital Scholar Lab でテキストマイニングでもご利用いただけます。

以下の収録文献例では、刊行当時の時代状況や社会通念を伝えるために、現在では差別的であるため使用することが望ましくないとされる語句が使われています。また、現在は通常障害とは見なされない対象も含まれています。ご了承ください。

収録文献(例)

ニューヨーク医学アカデミー図書館所蔵障害関係書籍集成

聴覚障害

- ◆ I.B. (ジョン・バルワー) 『フィロコファス：聾啞者の友』(1648)
- ◆ ジョセフ・ワトソン 『聾啞者の教育、あるいは言葉の習得に関する聾啞者教育の方法に関する理論的・実際の視点』(1809)
- ◆ ジョン・C・サンダース 『人間の耳の解剖』(1817)
- ◆ ジョン・H・カーティス 『耳の生理学と疾病に関する論考』(1817)
- ◆ ジョン・ステューヴンソン 『聾：その原因、予防、治療』(1828)
- ◆ トマス・ブキャナン 『聴覚器官の生理学的解説』(1828)
- ◆ ウィリアム・ライト 『聾の多様性と耳の疾病について』(1829)
- ◆ デヴィッド・トッド 『聴覚器官の解剖と生理学』(1832)
- ◆ ジョン・H・カーティス 『耳の生理学と病理学に関する論考』(1836)
- ◆ エドウィン・J・マン 『聾啞：聾啞者の状態、教育、教育施設に関する論集』(1836)
- ◆ ウィリアム・ダフトン 『聾と耳の疾病の本質と治療』(1844)
- ◆ ハーヴェイ・ビート 『聾啞者の法的権利と責任』(1856)
- ◆ ジェイムズ・ホーキンス 『聾啞の身体的、道徳的、知能的構成』(1863)
- ◆ W.R. スコット 『聾啞者：その教育と社会的地位』(1870)
- ◆ ピーター・アレン 『耳のカタル講義：聾の共通の形態と治療』(1871)
- ◆ ジェイムズ・キーン 『聾の原因と治療：耳の手術の手引』(1873)
- ◆ アルトゥール・ハルトマン 『聾啞と読唇術と調音による聾啞者教育』(英訳増補版) (1881)
- ◆ アレクサンダー・G・ベル 『聾に関する事実と意見』(1888)
- ◆ ジョセフ・C・ゴードン 『聾者の教育に関する覚書と考察』(1892)
- ◆ ジェイムズ・K・ラブ、W.H. アディソン 『聾啞の臨床的・病理学的研究』(1896)
- ◆ エドワード・A・フェイ 『アメリカにおける聾者の結婚』(1898)
- ◆ J. ホワイトフィールド・スミス 『公立学校における視覚障害と聴覚障害：教員用ハンドブック』(1904)
- ◆ エドワード・B・ニッチー 『読唇術の原理と実践：教員用自習用ハンドブック』(1912)
- ◆ ハリー・ベスト 『聾者：社会における位置と合衆国における教育』(1914)
- ◆ アネッタ・ベック他 『耳と人間：聾者のためのソーシャルワーク研究』(1926)
- ◆ 赤十字協会連盟 『失明の予防』(1929)
- ◆ ジャン・M・G・イタール 『アヴェロン野生児』(英訳) (1932)
- ◆ ハロルド・M・ヘイス 『聾の現代的観念』(1932)
- ◆ ラルフ・K・ポッター他 『視話法』(1947)

視覚障害

- ◆ ウィリアム・アダムス 『人工瞳孔に関する論考』(1819)
- ◆ アルフレッド・C・ポスト 『斜視の治療に関する観察』(1841)
- ◆ ウィリアム・アートマン、L.V. ホール 『盲人の美と業績』(1854)

- ◆ アルフレッド・スミー 『眼の健康と疾病』(1854)
- ◆ W. ハンクス・リーヴィ 『盲と盲人：盲目学 (Science of Typhology) 試論』(1872)
- ◆ ウィリアム・ムーン 『盲人のための光：ムーンタイプの聖書や書物普及の起源と成功』(1879-1882)
- ◆ エミール・ジャヴアル 『盲人の世界』(英訳) (1904)
- ◆ オスカー・エバーブッシュ他 『児童期における眼の疾病と発話障害』(1914)
- ◆ チャールズ・F・F・キャンベル、メアリー・D・キャンベル 『アメリカにおける盲人用施設：合衆国とカナダにおける就業便覧』(1916)
- ◆ ハリー・ベスト 『盲人：盲人の状態と合衆国における盲人支援活動』(1919)
- ◆ J.M. リチー 『英国における盲人に対する組織的活動に関する歴史的素描と先天的盲人の精神生活に関する若干の考察』(1930)
- ◆ トマス・D・カツフォース 『学校と社会における盲人：心理学的研究』(1933)
- ◆ マックス・A・ゴールドスタイン 『盲人の諸問題』(1933)
- ◆ ラルフ・V・メリー 『視覚障害児童教育の諸問題』(1933)
- ◆ エレノア・G・ブラウン 『ミルトンの失明』(1934)
- ◆ ハリー・ベスト 『合衆国における盲と盲人』(1934)
- ◆ 全英盲人研究所 『盲人に関するすべて：盲人はいかに助けられ自ら助けるか』(1939)
- ◆ オルダス・ハクスリー 『見る技術』(1942)
- ◆ ウィリアム・D・ライト、L・C・マーティン 『正常色覚と色覚異常』(1947)
- ◆ ポール・A・ザール (編) 『失明：見えざる環境への現代的アプローチ』(1950)
- ◆ ゲーザ・レーヴェース 『失明者の心理学と芸術』(英訳) (1950)
- ◆ イシュベル・ロス 『光への旅：失明者の教育の物語』(1951)
- ◆ ヴィクター・ローウェンフェルド 『創造的活動の本質』(1952)

発話障害

- ◆ ウィリアム・ホルダー 『発話の要素：文字の自然な生成に関する探究試論』(1669)
- ◆ リチャード・カル 『発話の法則の適用による治療に関して考察された吃音』(1835)
- ◆ ジョン・ビショップ 『有節音と発話障害の原因と治療』(1851)
- ◆ ジョージ・F・アーリング 『吃音者、講演者、軽度発話障害者のための発声訓練』(1856)
- ◆ ジェイムズ・ハント 『吃音：その性質と治療』(1861)
- ◆ ジョン・ワイリー 『発話障害』(1894)
- ◆ L. クラインドワース 『吃音と治療法：自習用実用的体系的便覧』(1896)
- ◆ ウィリアム・エルダー 『失語症と脳の発話機構』(1897)
- ◆ H. チャールトン・バスティアン 『失語症とその他の発話障害』(1898)



ムーンタイプと呼ばれる触読用文字 (ウィリアム・ムーン『盲人のための光』より)



ローラ・ブリッジマンがオリバー・カースウェルに触読用文字を教える (二人は聴覚視覚発話障害者) (メアリー・S・ランソン『ローラ・D・ブリッジマンの生涯と教育』より)



ヘレン・ケラーとアン・サリヴァン・メイシー (ヘレン・ケラー『アン・サリヴァン・メイシー先生』より)



ニューヨーク盲人協会創設者ウィニフレッド・マザー (イーデイス・H・ブラッドグッド編『ウィニフレッド・H・マザー伝』より)

- ◆ ジョージ・A・ルイス 『吃音の起源と治療』 (1906)
- ◆ アレクサンダー・G・ベル 『発話機構: 聾者教育促進協会講演』 (1907)
- ◆ ベンジャミン・N・ボグ 『吃音: その原因と治療』 (1922)
- ◆ ヘンリー・ヘッド 『失語症と類似の発話障害』 (全2巻) (1926)
- ◆ ウェンデル・ジョンソン 『なぜなら私はどもるから』 (1930)
- ◆ アン・H・マクアリスター 『発話療法の臨床研究』 (1937)
- ◆ メイベル・H・ギフォード 『神経性発話障害の矯正』 (1939)
- ◆ ユージン・F・ハーン 『吃音: 重要な理論と療法』 (1943)
- ◆ ヘンリー・セントジョン・ラムゼイ 『吃音者の選択: 言語療法の比較』 (1950)
- ◆ ウォルター・R・ブレイン 『発話障害: 失語症、失行症、失認症』 (1961)
- ◆ マーガレット・エルドリッジ 『発話障害の治療の歴史』 (1968)
- ◆ イネス・V・オニール 『1600年以前の西洋思想における発話と発話障害』 (1980)
- ◆ マルコム・R・オニール他 (編) 『ディサースリア: 生理、音響、知覚、管理』 (1984)
- ◆ オードリー・L・ホランド 『成人の言語障害』 (1984)
- ◆ マーガレット・エドワーズ 『構音障害: ディサースリアと発話障害』 (1984)
- ◆ フランコ・ファブロ (編) 『簡略言語病理学百科事典』 (1999)

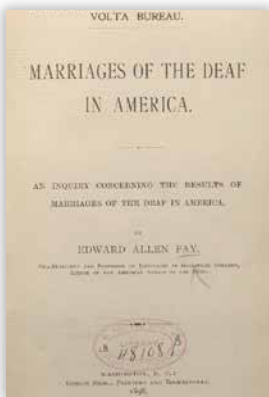
精神障害

- ◆ ウィリアム・C・エリス 『精神異常の本質、徴候、原因、診療に関する論考』 (1838)
- ◆ アイザック・ハント 『精神病院の3年間: 犠牲者自身による驚くべき暴露』 (1852)
- ◆ サミュエル・クナグス 『犯罪行為の責任の問題に関して考察された精神異常』 (1854)
- ◆ ジョン・コノリー 『機器による拘束なしの精神異常者の治療』 (1856)
- ◆ アイザック・B・ブラウン 『女性における精神異常、癲癇、強硬症、ヒステリーの特定の形態の治癒可能性』 (1866)
- ◆ エドワード・セガン 『白痴と生理学的方法による診療』 (1866)
- ◆ ジョージ・F・ブランフォード 『精神異常とその診療: 精神異常患者の医学的診療と法的措置』 (1871)
- ◆ ウィリアム・W・アイアランド 『白痴と痴愚』 (1877)
- ◆ ジョセフ・M・グランヴィル 『精神異常者の保育と治療: ランセット精神病院委員会報告書』 (1877)
- ◆ ジョージ・M・ピアード 『アメリカの神経衰弱』 (1881)
- ◆ サラ・カーペンター、ウィリアム・レッチワース 『特定の国々における慢性精神異常報告』 (1882)
- ◆ ウィリアム・S・ブレイフェア 『神経衰弱とヒステリーの体系的診療』 (1883)
- ◆ トマス・S・ダウス 『神経衰弱: その性質と診療』 (1887)
- ◆ 『ニューヨーク病院協会と精神異常者治療の関係の歴史』 (1891)
- ◆ ヘンリー・C・バーデット 『世界の病院と精神病院: 起源、歴史、設立、運営、管理、法制』 (全4巻) (1891-93)
- ◆ フレデリック・ペートマン 『白痴: 生物界における位置と社会に対する権利請求』 (1897)
- ◆ エイドリアン・ブルースト、ジルバール・バレ 『神経衰弱の治療』 (英訳) (1902)
- ◆ アーサー・マクドナルド 『人と異常人: 児童の研究を含む』 (1905)
- ◆ J. ミッチェル・クラーク 『ヒステリーと神経衰弱』 (1905)

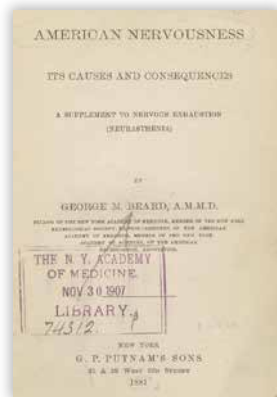
- ◆ ウィリアム・テイラー・マース 『神経衰弱者の告白』 (1908)
- ◆ トマス・D・セイヴィル 『神経衰弱臨床講義』 (1908)
- ◆ 『精神薄弱者の問題: 精神薄弱者の保育と監督に関する王立委員会報告書梗概』 (エドワード・フライ序文、フランシス・ゴルトン、アーサー・ビグー他寄稿) (1909)
- ◆ ジルバール・バレ 『神経衰弱』 (英訳) (1909)
- ◆ アン・ムーア 『ニューヨークの精神薄弱者: ニューヨーク公立教育協会用報告書』 (1911)
- ◆ バーナード・S・テルミー 『性的神経衰弱: 男性と女性の性的不能』 (1912)
- ◆ ジョン・H・ケロッグ 『神経衰弱、あるいは神経疲労』 (1914)
- ◆ アルフレッド・ピネ 『精神薄弱者の知能』 (英訳) (1916)
- ◆ エドガー・A・ドール 『精神薄弱の臨床研究』 (1917)
- ◆ アーサー・C・ロジャース、モード・A・メレル 『シデムの谷の住人: 精神薄弱の社会的側面の真実』 (1919)
- ◆ ハミルトン・C・マー 『戦争の精神障害: 神経衰弱とシェルショックを含む』 (1919)
- ◆ アルフレッド・F・トレッドゴールド 『精神薄弱 (健忘)』 (1920)
- ◆ モンタギュー・ロマックス 『精神病院の医師の経験: 法制度改革の提言を付す』 (1921)
- ◆ レイチェル・グラント・スミス 『精神病院の患者の経験』 (モンタギュー・ロマックス序文) (1922)
- ◆ シドニー・L・プレッシャー、ルエラ・C・プレッシャー 『精神異常と精神薄弱: 精神衛生問題研究序説』 (1926)
- ◆ レオン・P・クラーク 『アメンティアの特質と治療: 知能の科学に関する精神分析と精神抑制』 (1933)
- ◆ ハンス・O・ワイルデンスコフ 『精神薄弱の原因探求』 (1934)
- ◆ クララ・H・タウン 『家族性精神薄弱: 141家族の研究』 (1939)
- ◆ ライオネル・S・ベンローズ 『1280の精神障害症例の臨床的・遺伝的研究』 (1947)
- ◆ ジョン・ヴィンセント 『精神病院の内幕』 (ヴェラ・プリテン序文) (1948)
- ◆ ウォルター・B・ウォルフ 『神経を宥めよ: 神経衰弱の予防と治療』 (1948)
- ◆ レオ・カナー 『精神遅滞者の保育と研究の歴史』 (1964)

児童の精神障害

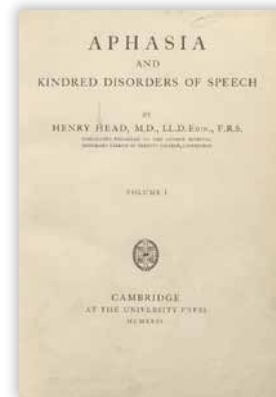
- ◆ アイザック・N・カーリン 『ハールを剥がされた精神、あるいは22人の痴愚児小史』 (1858)
- ◆ ジョン・F・メイグス、ウィリアム・ペパー 『児童の疾病の実用的論考』 (1883)
- ◆ フレッチャー・ピーチ 『精神薄弱児の診療と教育』 (1895)
- ◆ G.E. シャトルワース 『精神薄弱児の診療と訓練』 (1895)
- ◆ 『ニューヨーク児童養育院の1,000人の白人と有色人種児童に関する人類学的研究』 (1898)
- ◆ ウィリアム・W・アイアランド 『児童の心的感情: 白痴、痴愚、狂気』 (1900)
- ◆ C. バジレット・ラベージ 『学齢児童における精神薄弱』 (1911)
- ◆ アーサー・ホームズ 『児童の保護: 遅れた児童の診断と診療に関する臨床心理学手引』 (1912)
- ◆ アルフレッド・ピネ、テオドル・シモン 『精神薄弱児』 (英訳) (1914)
- ◆ マーガレット・バンクロフト 『精神遅滞と精神遅滞児の保育と訓練著述論集』 (1915)
- ◆ アルフレッド・ピネ 『児童における知能の発達』 (英訳) (1916)
- ◆ オーガスタ・F・プロナー 『特殊な能力と障害の心理学』 (1917)
- ◆ マクシミリアン・P・E・グロスマン 『特異児童』 (1917)



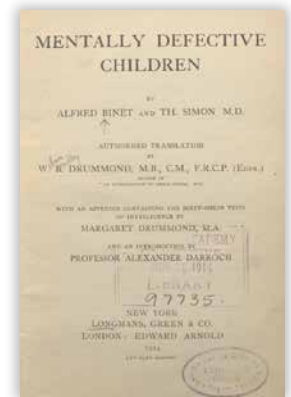
エドワード・A・フェイ
『米国における聾者の結婚』



ジョージ・M・ピアード
『アメリカ的神経衰弱』



ヘンリー・ヘッド
『失語症と類似の発話障害』



アルフレッド・ピネ他
『精神薄弱児』

- ◆ ハーバート・H・ウッドロー『児童における優秀と愚鈍』(1919)
- ◆ エリダ・エヴァンズ『神経症の児童の問題』(C.G. ユング序文) (1920)
- ◆ アリス・デグドール『精神薄弱児の教育:心理学的考察と実務的提言』(英訳) (1928)
- ◆ エスター・L・リチャーズ『児童の振舞いの行動的側面』(1932)
- ◆ クレアレット・P・アームストロング『660 人の家出少年』(1932)
- ◆ チョーンシー・M・ルーティット、ガードナー・マフィー『児童の行動問題の臨床心理学』(1947)
- ◆ サミュエル・A・カーク、G. オーヴィル・ジョンソン『遅滞した子供を教育する』(1951)

身体障害

- ◆ ダグラス・C・マクマートリー『合衆国における肢体不自由児の保育』(1912)
- ◆ ヘンリー・ライト『ニューヨーク市肢体不自由者調査』(1920)
- ◆ ジョン・C・フェイリス『障害者のための3年間の活動:身体障害者研究所の活動報告』(1920)
- ◆ ヘンリー・E・アプト『肢体不自由児の保育、治療、教育:合衆国の関連施設の研究』(1924)
- ◆ ニューヨーク肢体不自由児研究委員会『ニューヨークの肢体不自由児報告』(1940)
- ◆ ルドルフ・ピントナー他『身体障害者の心理学』(1941)
- ◆ カーニー・ランディス、メアリー・M・ボリース『身体障害者女性の人格とセクシュアリティ』(1942)
- ◆ ロメイン・P・マッキー『アメリカの教育における肢体不自由児 1939-1942年』(1945)
- ◆ アーサー・T・ジェイコブス『障害のある労働者の使用方法』(1946)
- ◆ デヴィッド・ヒンショー『起きて、床を担いで歩け』(1948)
- ◆ マリー・バイノン・レイ『あなたの障害の克服法』(1948)
- ◆ 米国労働統計局『製造業における身体障害者の作業実績』(1948)
- ◆ ベアトリス・A・ライト『身体障害:心理学的アプローチ』

リハビリテーション

- ◆ ジョン・H・C・コルソン『負傷者のリハビリテーション:作業療法』(1944)
- ◆ ヘンリー・H・ケスラー『身体障害者のリハビリテーション』(1947)
- ◆ キャロライン・H・エルッジ『患者のリハビリテーション:医療におけるソーシャルケースワーク』(1948)
- ◆ ハワード・A・ラスク、ユージン・J・テイラー『障害者の新しい希望:ベッドから仕事へのリハビリテーション』(1949)
- ◆ ウィリアム・H・ソーデン『障害者のリハビリテーション:方法のサーヴェイ』(1949)
- ◆ アーサー・ジュス・ウィルソン『病人と負傷者の情動生活:リハビリテーションと指導の心理学と精神衛生』(1950)
- ◆ ハリー・A・パティソン『身体障害者とりハビリテーション』(1957)
- ◆ イーディス・ブックウォルド・ロートン『身体リハビリテーションのための日常生活の活動』(1963)
- ◆ 米国衛生教育福祉省職業リハビリテーション局『51ヵ国における障害者のリハビリテーション』(1964)

感染症

- ◆ ウィリアム・ホワイト『結核の治療の本質と方法に関する考察』(1792)
- ◆ アルバート・アンソニー、ジョエル・シュール『コレラ、その原因、予防、治療』(1855)
- ◆ J.J. クイン『1873年のシンシナティのコレラ』(1874)
- ◆ セオドア・B・サックス『シカゴにおける結核対策:シカゴ市営結核療養所』(1915)

優生学

- ◆ ロバート・R・レントゥール『人種文化、あるいは人種の自殺?』(1906)
- ◆ ジェームズ・E・ミアーズ『人種改良の問題』(1910)
- ◆ ヘンリー・H・ゴダード『カリカック家:精神薄弱の遺伝に関する研究』(1912)
- ◆ ハリー・H・ラフリン『合衆国における優生断種』(1922)
- ◆ ジェームズ・フォード(編)『社会問題と社会政策:貧困、障害、犯罪の治療と防止の基本原則』(1923)
- ◆ チャールズ・P・ブリュール『基本倫理原則の光に照らして見た産児制限と優生学』(1928)
- ◆ エズラ・S・ゴスニー、ポール・B・ポープノー『人間改良のための断種:1909年から1929年までの間にカリフォルニアで実施された6,000件の手術の結果概要』(1929)
- ◆ ウォルター・M・ガリチャン『不適格者の断種』(1929)
- ◆ カリフォルニア州人間改良基金『カリフォルニアにおける優生断種に関する論集』(1930)
- ◆ J.H. ランドマン『人間の断種:断種運動の歴史』(1932)
- ◆ アーネスト・J・リドバター『遺伝と社会問題グループ』(1932)

- ◆ チャールズ・P・ブレイカー『自発的断種』(1934)
- ◆ レオン・B・ホイットニー『断種擁護論』(1934)
- ◆ ヘレン・マクマーチー『断種?産児制限?家族の福祉と安全のための書籍』(1934)
- ◆ 米国神経学会優生断種調査委員会『優生断種:問題の再考』(1936)
- ◆ ジョセフ・B・ルヘイン『優生断種に関する米国民事立法の道德性』(1944)
- ◆ レオ・アレクサンダー『ドイツにおける公衆精神衛生の実態:神経・精神障害者の断種と殺害』(1945)

伝記

- ◆ 『著名な聾啞の紳士ダンカン・キャンベル氏の秘められた回想録』(1732)
- ◆ ジェイムズ・ワードロップ『盲聾児として生まれたジェイムズ・ミッチェルの伝記、視力の回復のための手術の説明を付す』(1813)
- ◆ W. スミス『ダフト・ジェイミーの名で知られるジェイムズ・ウィルソンの生と死に関する簡潔な物語』(1829)
- ◆ ウィリアム・スライト『聾者からの声:ブライトン・サセックス聾啞児童学校元生徒ジョン・ウィリアム・ラシュフォードの回想』(1848)
- ◆ ヘンリー・バーナード『ギャロウデット賛:トマス・H・ギャロウデット牧師の生涯、性格、奉仕に関する記念講演』(1852)
- ◆ 『ニューヨーク聾啞学校校長ハーヴェイ・P・ピートの伝記的素描』(1857)
- ◆ メアリー・S・ランソム『盲聾の少女ローラ・デュエイ・ブリッジマンの生涯と教育』(1895)
- ◆ モード・ハウ・エリオット、フローレンス・M・H・ホール『ハウ博士の著名な教え子ローラ・ブリッジマンとその教育』(1904)
- ◆ EB. サンボーン『マイケル・アナグノス 1837-1906年』(1907)
- ◆ ヘレン・ケラー『私が生きる世界』(1908)
- ◆ ヘレン・ケラー『暗闇の中から:随想、書簡、講演録』(1914)
- ◆ 『神経衰弱者の自伝(マーガレット・クリーヴズ記録)』(1910)
- ◆ ジェイムズ・ソネット・グリーン『私はともりだった』(1932)
- ◆ ヘンリー・ランドルフ・ラティマー『盲の征服:自伝的概観』(1937)
- ◆ ニコラス・アールリック『喉頭切除者の生涯』(1937)
- ◆ ボーグヒルド・ダール『私は見たかった』(1944)
- ◆ テオドール・ヘッカー『不具の人キルケゴール』(英訳) (1950)
- ◆ J. アルヴィン・クゲルマス『ルイ・ブライユ:失明者のための窓』(1951)
- ◆ イーディス・H・ブラッドグッド(編)『ニューヨーク盲人協会創設者ウィニフレッド・H・マザー伝』(1952)
- ◆ ヴァン・ワイク・ブルックス『ヘレン・ケラー』(1956)
- ◆ ヘレン・ケラー『アン・サリヴァン・メイシー先生』(1956)
- ◆ エリック・ウォーレンコット・バーンズ『二生を経た男:エドワード・シェルドン伝』(アン・モロー・リンドバーグ序文) (1956)
- ◆ マクシム・タル・ポトナー『聾者の声:エドワード・マイナー・ギャロウデットの伝記』(1959)
- ◆ ジョセフ・フランクリン・モンタギュー『類稀なる医師アルバート・シュヴァイツァーの生涯』(1965)

施設

- ◆ トマス・フォークナー『王立病院とチェルシー戦没兵孤児養護院の歴史的・記述的説明』(1805)
- ◆ ジョナサン・グレイ『ヨーク精神病院の歴史』(1815)
- ◆ J. エドワード・ターナー『世界初のアアルコール依存症病院の歴史』(1888)
- ◆ J.H. ケロッグ『バトルクリーク・サニタリウム・システム:歴史、組織、方法』(1908)
- ◆ エドガー・A・ドール『ワインランド研究所創立25周年記念論集』(1932)
- ◆ ドナルド・ベル『教育における実験:ウスター盲学校の歴史 1866-1966年』(1967)

聴覚障害

- ◆ トマス・H・ギャロドット『コネティカット聾啞教育指導施設開校式での説教』(1817)
- ◆ トマス・H・ギャロドット『聾啞者を教育する義務と利点に関する説教』(1824)
- ◆ ハーヴェイ・P・ビート『高等教育機関での聾啞者教育に関する報告』(1852)
- ◆ ジョセフ・トインビー『聾啞者：その状態、教育、診療』(1858)
- ◆ アレクサンダー・グラハム・ベル『手話の問題と聾者教育における記号の効用』(1898)
- ◆ ヴォルタ研究所『聾学校国際報告』(1898)
- ◆ アレクサンダー・G・ベル『米国における口話法の発展』(1917)
- ◆ ジョセフ・M・チャブル『聾とその原因に関する 20 年間の研究』(1930)
- ◆ リチャード・マッデン『聴覚障害児の学校での地位』(1931)
- ◆ エリス・H・マーテンス『職業世界における聾者と聴覚障害者：米
国教育省の委託による調査報告』(1937)
- ◆ 英国聾研究所『英国の聾者：概観』(1961)
- ◆ T.H. サトクリフ『聾者との会話』(1968)

視覚障害

- ◆ 『ニューヨーク聾学校の報告と創設から現在までの歴史』(1833)
- ◆ ジョン・H・カーティス『視力の保存、眼病、眼鏡と老眼鏡の使用、悪用、
選択』(1848)
- ◆ ウィリアム・H・ミルバーン『私の失明とアルブレヒト・フォン・グレー
フェ』(1873)
- ◆ W.J. コンクリン『デイトン公立学校に焦点を当てた学校生活の視力
への影響』(1880)
- ◆ マイケル・アナグノストポウロス『合衆国における盲人教育：その原
理、発展、結果』(1904)
- ◆ ウォルター・B・ジョンソン『学齢児童の視覚異常』(1910)
- ◆ 英国保健省盲人の福祉諮問委員会『イングランドとウェールズにお
ける盲人の福祉ハンドブック』(1934)
- ◆ ヘレン・ケラー『盲人のための 15 年の活動：米国盲人協会 1923-
1938 年』(1938)
- ◆ フレデリック・パートレット、N.H. マクワース『計画された視力：
心理学的実験』(1950)

発話障害

- ◆ B. ピアスリー『吃音：その診療』(1879)
- ◆ フランク・A・ブライアント『吃音に関する質疑応答』(1916)
- ◆ サミュエル・D・ロビンス『吃音を失くす方法』(1921)

精神障害

- ◆ J.W. ロジャース『狂気の家で実施されている残虐、虐待、欺瞞』(1816)
- ◆ ルーファス・ワイマン『精神病に関する道徳哲学』(1830)
- ◆ R.C. ウォーターズトン『マサチューセッツにおける精神異常者の状態』
(1843)
- ◆ レイ『精神病院に対する大衆の感情』(1852)
- ◆ サミュエル・G・ハウ『白痴児童教育のための実験学校に関する第三・
最終報告』(1852)
- ◆ エドワード・J・シーモア『私立精神病院の規制法』(1859)
- ◆ H. ブリンフィールド『イングランドの狂気の家々の制度とシステムに関
する覚書と提言』(1861)
- ◆ セオドア・E・D・バーン『精神障害と法』(1864)
- ◆ サミュエル・G・ハウ『白痴の原因と予防』(1874)
- ◆ J. ラングドン・ダウン『精神薄弱者の教育と訓練』(1876)
- ◆ W.B. ハロック『精神異常者診療のためのコテージシステム』(1877)
- ◆ ブリニー・アール『精神異常の治療可能性』(1877)
- ◆ ジョージ・M・ピアード『妄想の科学的基礎』(1877)
- ◆ ハーヴェイ・B・ウィルバー『英国における精神異常者の管理』(1877)
- ◆ デヴィッド・D・フィールド『情動的な精神異常』(1878)
- ◆ ウィリアム・A・ハモンド『精神病院に依らざる精神異常者の診療』
(1879)
- ◆ ブリニー・アール『精神異常警見と米国諸州における精神異常者の
管理』(1879)
- ◆ マサイアス・ローズ『学校の保健と科学的体育』(1880)
- ◆ アイザック・N・カーリン『白痴・精神薄弱児の対策：白痴・精神薄
弱児に対する文明社会の責務』(1884)
- ◆ クラーク・ヘル『殺人を犯した精神異常者を絞首刑にすべきか』(1885)
- ◆ ウィリアム・M・バトラー『精神異常者の在宅診療』(1886)
- ◆ ウィリアム・A・ハモンド『狂気と殺人』(1888)
- ◆ ウォルター・E・ファーナルド『精神薄弱者の診療の歴史』(1893)
- ◆ マクシミリアン・P・E・グロスマン『特異児童の暫定的分類』(1909)

- ◆ ルウェリス・F・バーカー『精神衛生運動の局面と全米精神衛生委
員会の活動範囲』(1912)
- ◆ クリフォード・W・ピアーズ『精神衛生運動』(1917)
- ◆ トマス・W・サルモン『米軍における精神病と神経病の診療』(1918)
- ◆ マーガレット・K・ピアード『依存性と精神遅滞の関係：公立学校児
童 1,351 人の研究』(1919)
- ◆ フレデリック・W・パーソンズ『戦争神経症』(1919)
- ◆ H.T. バーカー『遅滞児における知能の発達』(1934)
- ◆ ノーマン・J・パウエル『受刑者における正常、精神病質、精神薄弱
診断の統計的分析』(1936)
- ◆ アレクサンダー・フラング『戦争の神経症と精神病』(1940)
- ◆ 英国政府管理局『精神障害法・精神治療法 1890-1930 年：精神病院
の準備・計画・建設のための提言と指針』(1940)
- ◆ ハーバート・ゴールドハマー、アンドリュウ・W・マーシャル『精神
病の頻度：長期的趨勢と現在』(1949)
- ◆ ロナルド・D・リード『精神障害の研究における疫学的方法』(1960)

非行

- ◆ C.M. バーネット『犯罪と精神異常：その原因、関連、帰結』(1852)
- ◆ エリシャ・ハリス『非行少年、無視、遺棄された児童、そのほか犯
罪に走る恐れのある児童に対する教育的・矯正的診療』(1877)
- ◆ ウォルター・チャニング『精神異常と犯罪の関係』(1885)
- ◆ バーナード・グリュック『非行経歴の種別』(1917)
- ◆ チャールズ・E・B・ラッセル『少年犯罪の問題』(1917)
- ◆ ヴィクター・A・アンダーソン『精神異常と非行の関係』(1918)
- ◆ ジョージ・A・ヘイスティングス『精神異常の非行者にとのように対
処すべきか』(1918)
- ◆ ウォルター・L・トレッドウェイ『非行者の精神医学研究』(1920)
- ◆ モーリス・クレイグ『犯罪と狂気』(1924)
- ◆ オリバー・F・フェイ『犯罪の生物学的側面』(1925)
- ◆ フレデリック・J・ファーネル『少年非行』(1929)
- ◆ ロバート・P・ダニエル『非行歴のある黒人少年と非行歴のない黒人
少年の心理学的研究』(1932)
- ◆ マージョリー・E・バブコック『人格の客観的測定による非行歴のある
少年と非行歴のない少年の比較』(1932)
- ◆ ロバート・バーレイ『学校、社会、非行』(1950)
- ◆ 『思春期の非行少年：英国医学会精神医学と法合同委員会報告』
(1951)
- ◆ ルース・W・ガヴィアン『少年非行を理解する』(1954)
- ◆ スタンリー・D・V・ウェラー『精神障害と非行』(1960)
- ◆ T.C.N. ギベンス『少年非行の趨勢』(1961)
- ◆ アーネスト・ハームス『精神障害の親、非行の子』(1962)

脳性麻痺

- ◆ M.A. パールスタイン『今日の脳性麻痺の問題』(1947)
- ◆ 『脳性麻痺：社会的問題：ニューヨーク市脳性麻痺連合主催シンポ
ジウム会議録』(1953)
- ◆ ニューヨーク市脳性麻痺調整評議会『脳性麻痺の人々に対する就業
カウンセリングとトレーニング』(1956)
- ◆ 英国脳性麻痺福祉評議会『脳性麻痺：現状と将来の可能性』(1956)
- ◆ 英国脳性麻痺福祉評議会『脳性麻痺の児童の在宅ケア親のための
ハンドブック』(1958)
- ◆ レイモンド・R・レンボルト『脳性麻痺に関する哲学の変化』(1959)
- ◆ モーリーン・オスウィン『脳性麻痺の児童における行動的問題』(1967)

施設

- ◆ 『ボストン精神病院の規則と法規』(1840)
- ◆ 『ブリガムホール：精神病院』(1860)
- ◆ 『1864 年 6 月 28 日ワシントン D.C. 聾啞大学創立式式辞』(1864)
- ◆ 『ニューヨーク肢体不自由者(Ruptured and Crippled)救援協会の起源、
進化と現状』(1870)
- ◆ ニューヨーク病院協会『ブルーミングデール精神病院は破壊すべき
か』(1886)
- ◆ 『簡約東京聾啞学校』(1896)
- ◆ 『故ヘンリー・フォスター創設のクリフトン・スプリングス療養所』
(1902)
- ◆ ジョン・ハーヴェイ・ケロッグ『バトルクリーク・サニタリウムの献立表』
(1909)
- ◆ J.H. ケロッグ『バトルクリーク・サニタリウム：健康回復のための施
設—起源、目的、方法』(1921)
- ◆ 『創立 1822 年ハートフォード静養所神経精神病院』(1932)
- ◆ ニューヨーク盲人協会『ライトハウスの 50 年 1905-1955 年』(1955)
- ◆ 英国聾研究所『聾者に尽くして 50 年 1911-1961 年』(1961)
- ◆ ジョン・クレイグ『王立アバディオン小児病院小史』(1968)

アルコール依存・薬物依存

- ◆ トマス・J・オフラティー『医学的飲酒論』(1828)
- ◆ ジョン・ウェア『振戦譫妄の歴史と診療に関する覚書』(1831)
- ◆ アンドリュー・ブレイク『振戦譫妄の名前で知られる疾病に関する実用的試論』(1834)
- ◆ マーマデューク・バー・ライト『泥酔と精神異常に関する講義』(1845)
- ◆ W. ベティ・キングストン『飲酒癖：その原因と治療』(1892)
- ◆ T. トワイニング『飲酒癖と貧困』(1901)
- ◆ アルフレッド・C・ブレンティス『麻薬・薬物依存の問題』(1920)
- ◆ フレデリック・T・メリル『マリファナ、新しい危険な薬物』(1938)
- ◆ ハーバート・ヤーレス『アルコール依存症は病気である』(1946)
- ◆ 『英国省庁間薬物依存問題委員会暫定報告』(1961)
- ◆ スミス、クライン & フレンチ研究所『薬物依存：逃げ場なし』(1967)

身体障害

- ◆ ジョージ・ヘイワード『四肢切断統計』(1850)
- ◆ セオドア・R・ヴァリック『道路での負傷—四肢損傷』(1884)
- ◆ ダグラス・C・マクマートリー『肢体不自由児の非施設系ケアの実例』(1910)
- ◆ ダグラス・C・マクマートリー『合衆国における肢体不自由児教育』(1912)
- ◆ ダグラス・C・マクマートリー『米国における肢体不自由児のケア』(1912)
- ◆ ヒュー・S・カミング『世界大戦負傷兵のケアにおける公衆衛生局の活動』(1921)
- ◆ 『ニューヨーク州肢体不自由児調査委員会報告書』(1925)
- ◆ アーチ・O・ヘック『肢体不自由児の教育』(1930)
- ◆ ドロシー・ギトニック『米国の大学の身体障害学生』(1944)

リハビリテーション

- ◆ ダグラス・マクマートリー『傷痍兵のリハビリテーション』(1918)
- ◆ 英国労働省『障害者リハビリテーション再就職常設委員会報告』(1946)
- ◆ 英国労働省『障害者リハビリテーション再就職常設委員会第二報告』(1949)
- ◆ 米国職業リハビリテーション局『職業リハビリテーションによる盲人と視覚障害者の機会獲得』(1951)
- ◆ 英国医学会『障害者のリハビリテーションと再就職』(1954)
- ◆ W. ラッセル・グラント『リハビリテーションの原理』(1963)
- ◆ 米国病院協会『病院と関連施設におけるリハビリテーション』(1966)

ハンセン病

- ◆ ウィリアム・テブ『公衆衛生：ハンセン病と予防接種』(1891)
- ◆ アルバート・S・アシュミード『日本におけるキリスト教とハンセン病患者の問題』(1891)
- ◆ ロバート・G・コ克蘭『インドのハンセン病概観』(1927)

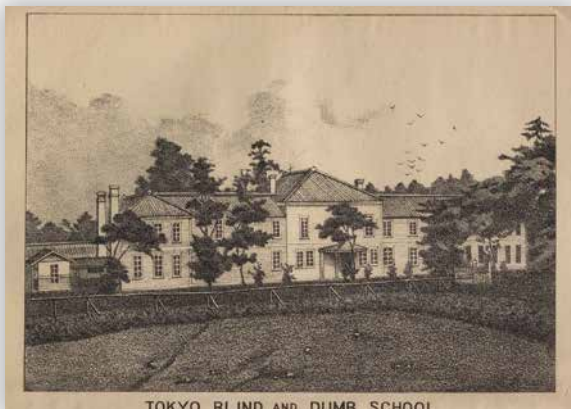
- ◆ フレデリック・ホール『マコガイ島ハンセン病病院の概説』(1927)
- ◆ オズワルド・E・デニー他『ハンセン病からの回復：65の症例記録の分析』(1930)
- ◆ レナード・ロジャース『大英帝国救済協会の創設と最初の21年の活動』(1945)
- ◆ アーネスト・P・パイル『ハンセン病コロニーからの手紙』(1945)
- ◆ ロバート・G・コ克蘭『ハンセン病、その課題と希望』(1960)
- ◆ カールトン・ブラス『ハンセン病における危険と安全』(1965)
- ◆ スタンリー・G・ブラウン『ハンセン病、新しい希望と持続する課題』(1966)
- ◆ ウィリアム・ブライス・フィリップス『ハンセン病』(1969)
- ◆ ロバート・G・コ克蘭『ハンセン病—徴候、診断、診療』(刊行期不詳)
- ◆ W.M. ダナー『世界からハンセン病を取り除く』(刊行期不詳)

伝記

- ◆ フィービー・B・デイヴィス『ユーティカのニューヨーク精神病院の2年と3ヵ月』(1855)
- ◆ 『すばらしき障害者レオナード・トラスクの生涯と苦痛』(1858)
- ◆ アン・ブラット『キングストン精神病院での7ヵ月』(1860)
- ◆ ヘンリー・W・サイル『米国初の偉大な聾教育者トマス・H・ギャロデット牧師の伝記的素描』(1887)
- ◆ ノーマン・G・ワイマー『ルイ・ブライユ』(1957)

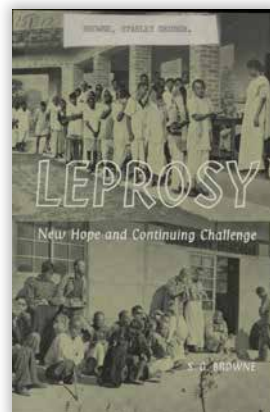
優生学

- ◆ ヘンリー・H・ゴダード『精神薄弱の遺伝』(1910)
- ◆ C.V. ドライスデール『ネオマルサス主義と優生学』(1912)
- ◆ ヘンリー・A・コットン『精神病の遺伝の研究における諸問題』(1912)
- ◆ M.P. ダウリング『人種の自殺、極めて古い問題』(1916)
- ◆ H.C. シャープ『退化者の断種』(1917)
- ◆ C.V. ドライスデール『マルサス理論とその現代的側面』(1918)
- ◆ M.P. ダウリング『人種の自殺、産児制限』(1919)
- ◆ チャールズ・B・ダヴェンポート『モンゴロイド小人の家族研究』(1925)
- ◆ 『合衆国優生学会選別的移民委員会第二・第三報告書』(1925)
- ◆ ハリー・H・ラフリン『合衆国における優生断種の歴史的、法的、統計的概観』(1925)
- ◆ チャールズ・B・ダヴェンポート『体格形成の要因としての遺伝と文化』(1925)
- ◆ チャールズ・B・ダヴェンポート『遺伝性精神障害の本質』(1926)
- ◆ 『精神薄弱者用入植地建設に関する諸問題：英国保健省の承認の下、管理局により任命された省庁委員会報告』(1931)
- ◆ ロナルド・A・フィッシャー『人間の生殖能力の社会選択』(1932)
- ◆ チャールズ・B・ダヴェンポート『人間におけるメンデル主義』(1932)
- ◆ コラ・B・S・ホドソン『今日の人間の生殖能力：現状のサーヴェイ』(1934)
- ◆ 米国優生学会『優生政策の発展：優生学の新しい方向の科学的基礎』(1937)
- ◆ C.P. ブラッカー『ゴルトン講演：優生学の展望と回顧』(1945)



TOKYO BLIND AND DUMB SCHOOL

東京聾啞学校
(『簡約東京聾啞学校』より)



スタンリー・G・ブラウン『ハンセン病、新しい希望と持続する課題』



米国初の聾学校を設立したトマス・ギャロデット (ヘンリー・サイル『トマス・H・ギャロデット牧師の伝記的素描』より)



すべてのコンテンツと機能をお試しいただける無料トライアルをご提供しております。

商品に関するお問い合わせは、センゲージャーニング株式会社までお願いします。

Tel : 03-3511-4390 E-mail : GaleJapan@cengage.com URL : www.gale.com/jp